



忠孝比玉傳

貳



3卷
981
2



達 3
121
2

らん
の
か
た
す
る
こと
か
らん

本清

忠孝比王傳卷之二

第五回 定隆見義豊席上説兵略

養拙菴主人著



天時不如地利地利不如人和
房母源義豊ハ智勇兼ハ良將ナリ
と懐け武道と洞練して兵を強し
降國上總へ兵分遣し
先小田喜城と圍んで土木
幕下は属せしめを勢良強大に
ハ武備と武人との房州へ下り
習く館山城下は短小國



中と巡りし將は義豊は渴せんと招成と求めく里見の四老
職の睦ひは官の志と通ぐる義豊時よ士と招の最中る
を喜ぶ大の喜び急ぎ對面するを吉日と撥み空陸と名
をされたる席上より大守義豊を掲げ坐るが次は木曾堀
内勝山安西の四老と始めを外房谷よ名する勇士星の敷
如くもぞ列坐しり義豊空陸は對ひ足下百里の路と遠と
せびて下國よ来る夏と多謝す我兼く足下の勇名を以
細くかど尽して我よ夏へ忠々の志を勵ぐと有るを空
陸頭と下げ愚臣撲藪の支うるといども久しく明君の徳を
慕ひ永く教化よ活せんと欲す唯献芹の愚忠と弁ぬ

大馬の勞を厭ひ奉らずと答ふが義豊今天下擾乱し諸族
各を併と争ふ常は名士と得る者ハ兵強く國増し平士はほ
者ハ戦弱く國削る是下幸は我が軍師とて且は何と以
兵を強く國と利すべき空陸曰夫兵者臨機急変の術
うまがを夏前より空むべしとていども地理の善悪用兵の
利鈍は逆め空評すべき夏あり兵書は廟算の術なりと評す
日算多者勝少者敗とい皆戦の務有て前より評論して
後兵強出す溜るり入る君の尊才向は對し點して空陸は
實よ不慮の似ひ心をなすから死生を顧みむ獲と授け
上りもろく更は憶する状を優劣とて素袍の袖を

長江竊に當國の地理を檢ひ南方を畏て思土暖和山
 谷良木多く海濱渾塩は是乃五穀能熟一國尊は民業
 直るの故は政夏煩くかかして軍陣自整兵は結山西は後
 少溪嶺東は時乃共一夫路は當は萬卒通つを往昔源頼
 固めり彼の蜀道の險といふも是より之く往昔源頼
 朝の義五之を奉り先は國は渡うて運を兩りて遂は天下の
 武將と仰まふ君も亦源頼の宗族何ぞ右大將は張
 むらんやと有まふ義豊完尔として我近年兵以上総(出)
 合戦屢功ありといふも未だ國中の諸城半ハ千葉の
 是乃康胤も威を下総は振ふ是を征せんといふ如何定

曰兵と下総(出)はるらんといふ今其時を
 勝ハ兵の利するの之を臣曩時謀入て下総の動靜を
 知る康胤も其主胤直と殺せ一奸賊の故は千葉の
 支族是を情乃曾て天廳は引ふり餘度使下向は及
 又先祖忠常が例の如く殺せしめん疑ふ康胤既
 亡びつが下総の争乱終は止べし君其時を窺ひ兵を
 賞罰公信やして百姓を撫育しぬる兩総の地ハ力を勞せ
 志て君が領國とせんといふは民豊を拍ては謀滅は當
 ともまは宮隆さまが康胤が暴威ハ却る味方の利も只
 悪き少糸早雲より彼近年隣國と合將は関東と吞の勢

あつては、あつては河総君あつては有と成と成ハ必自ら精兵あつては率て直あつては我
 軍と拒べし。又豊憤あつてはとて日。是と防ぎ戦ハ如何定隆曰
 孫子曰。衢地可親あつてはと先幣あつては帝と厚くして鎌倉植杉朝良あつては。既
 り朝良常あつては。早雲と悪む又其臣太田道灌武藏あつては。有とむ謀
 畧有とる。早雲の兵と出さあつては。なまを彼と喋あつては。合せ其虚あつては
 兼倉勢と以て小田原城と築あつては。是敵と狼唄せむ
 ぬ之を豊席の進とと知あつては。足下の兵畧悉く我意あつては。合
 して膝とてれたはあつては。定隆凡た兵と企あつては。天下あつては。臨人
 欲人ハ先盟主ととるあつては。と以て上策あつては。高祖項羽の義帝と
 多と始皇と征せし是あつては。今足利成氏公の諸公子あつては。二毛の

落穂あつては。一在すあり。江平幣と捧ては國あつては。定あつては。私と恭あつては。して師
 傳あつては。きまあつては。ん公方と扱んで諸侯あつては。は令する計あつては。る。君あつては。を後公子
 相と。房総あつては。三國の勢と率あつては。つ。葛飾あつては。へ討あつては。て。生利根の建康
 と前あつては。當嶋の臺あつては。と搦あつては。と賴朝公平家追討の舊あつては。は倣あつては。ひ。隅
 田川原あつては。へ陣あつては。し。白旗數十流あつては。を翻あつては。し。公方の令と傳あつては。へ。四方の
 及者と攻あつては。む。軍威他日あつては。は十倍あつては。して自ら天下あつては。は横あつては。行あつては。と。と
 究も換張あつては。が辨あつては。と揮あつては。い。速あつては。く。冬あつては。を始あつては。め。満坐あつては。し。並居あつては。る。諸士
 を英支あつては。と感あつては。ぐ。あつては。頃あつては。あつては。そ。を。席あつては。と起あつては。る。ひあつては。る。今日あつては。幸
 良縁あつては。ありて。天下あつては。の軍師あつては。と得あつては。る。と。自左文字あつては。のあつては。一振あつては。と
 取あつては。て。定隆あつては。より。再拜あつては。誓首あつては。して。是あつては。と受け。懸あつては。け。



時の面目と経ててと浪とる。却説も定隆ハ里見家と幕
 せま安房の惣大将とあり彼の平山藤代の両雄と指揮
 軍令齊整は終く士卒の志を得野々の陣戦六勝攻
 取つて多年の争うして上総と平均しぬを後思しと定隆が
 算せし如く節度使東國の下向し康胤父子滅亡し
 今も下総千葉家の猪城悉く定隆が武畧し靡さず皆里
 見家へ属しる義豊の如く其武功を賞下実ハ臆服耳目
 の良臣なりとて上総國と分一の地公割り定隆は場ひぬは
 下総と房州の援として下総五氣の悪害の地公見立一城と
 築き武備嚴重の治めたる時日泰上人歷年猪国の

人民と海邊に再び渡迎へ歸りてそのひるまは定隆急ぎ本行寺
 へ伺疾し上人は見え奉りて共は往復を結りて感歎敷刺りしか
 定隆師の内前より分つて入算子幸に妙法の功力よりして潤
 運し今軍國の王と仰せし又師の尊師の恩徳よする野之巳
 前約は背きせしむず封内残らず妙法は歸せぬとぞ
 則東総は十箇の大寺公建卒更し浪舟の本行寺と再興
 し境内十町四方七堂洞尾の大加監輪奐とて落城し其
 後多年の定隆切戒の古言と思ひ玉氣の本城ハ嫡
 子方防の後空居は漢と平山藤代の両士を執権と大永元年
 巳春自ら薙髮して清傳入道と号し次男隆敏を相具す

東金城と築ても隠居の世よと東金土氣の両坂井と云

第六回

大太純孝郷里養旨母

夫佛道ハ其教ヘと方の外ニ立るといふとも父母の愛重
云とす又ハ亦儒ニ異らざる孔門ニ孝經あり釋典ニ
父母恩重經あり爰ニ東總夷隅郡泉村ニ大太郎と云へる
者あり先祖ハ富有ニ暮せ農家なるが祖父の代より
次第ニ家衰へ田畑坐も残り少く治りたるうち父幸左
衛門なる者長病より母も風眼ゆく替ふに
今ハ農業とも成難く愈困窮なり此家居も積金

代て他へ譲り自ら小室草屋と造替さるも他の幼績
賃系よりとりて親子とよやく其日を送りたるは
比大太郎知より父母ノ孝むよりと露計つとも其意より
夏より父亡き後より母更旨母の代保よむ迄冬一其
母平生酒と好むは大太ハ成人ニ随ひはも業も怠り
昼ハ終日竹と造りて夜ハ更ら近索海市ニ鴨卵酒を買
帰る母よりよやく并脱せしめたり又折ら弗に脱法
ありと聞バ半道一里の所も厭ふ自ら母と肩并に
聴流の呉く頼置徳の終らん頃より又母と肩並
日毎の怠りたる家貧なるは夏ハ蠶の時へも母の

寒蕪ぬらししとて巳が衣類と活炬より燭と買すりて母の
圍に釣置きそるハいぶせ死改遣は夜と曙しそる衾の薄
けき母の凍へらししとて山林よ入る枯木と焦れり地
元の焚火よ當て寒氣と凌ぐも母寐が已か温袍と
暖めくよくおまを杖く癒させたり其材は澤水先生と
云儒師あり平常敷多の門人と會へ經史子集の溝淡
有るると太太ハ歸夫の身づからも中華聖人の金言は
まろく思ひ一日母よ少回の暇かんい其蒲席へ出
けりよ師の不孝有三無後為大と云孟子の文と講せ
るくと聴て荐は落涙よ及るるか泣くく意よ我姑婦

よかふ一人の母あつと云へども家貧しく夏足ざれば
朝夕の養ひひの如くするす去ばとて妻と送へば露
程も愛情よ更るく夏はつととも其若の不肯うふ
却る左母の心と傷もむべくと呼詮佛道は一子出家
すとい九族天よ生ずと社はるれば母人千秋万歳の好ハ
以家道世先祖父母の冥福と祈らえよ如くと年故已よ
三十と越えとて妻帯せずいよく孝行よと志うとせりり
けは曾て或日の雨後隣家の馬を假り如例新と用
て市よ杉鬮南々呼へ奥商の籃の中に四五頭の餅よ
と入荷のたまると見蕪荐よ左母よ食せとて思ひ錢一百

文と知り。其中の一屋を買ふ。多るが跡。ゆく酒價の足ら
 ざる夏を知り。諸如何せんと思へども。為すべき方のうけ
 止る氣の毒なる。群よて酒家よ。抵り。小二。舞い。今日。途
 中。ゆく不図。魚と買。不覚。酒の價と。被却せり。修卒
 後便。ま。美酒。一。借。給。り。る。べき。や。と。云。へ。を。小。二。微。笑
 う。ら。常。々。孝。心。の。人。と。は。さ。る。る。を。行。ふ。後。令。の。程。作。り
 糸。す。す。も。何。の。苦。か。る。べき。是。皇。天。へ。の。報。功。之。幸。即。今。口
 明。の。よ。れ。緒。白。あり。早。晚。量。つ。と。糸。く。せ。し。と。云。つ。酒。壘
 小。對。ぶ。よ。へ。く。ま。太。太。太。は。ま。む。び。残。銚。と。小。二。は。遍。一。酒
 と。魚。と。と。馬。の。鞍。よ。結。び。附。か。の。食。物。よ。上。乗。せ。ん。ハ。勿。体

う。と。自。ら。馬。の。轡。を。挽。て。帰。り。来。り。暇。は。人。數。多。強。擧。ず。る
 と。近。寄。り。見。ま。は。是。隣。村。の。寺。院。建。栄。の。虹。梁。と。極。越。の。名。
 地。車。に。載。せ。牛。よ。牽。せ。ま。る。成。々。々。が。泥。濘。は。車。輪。と。埋。め。
 衆。多。ゆ。推。ど。も。挽。ど。も。は。少。も。動。く。ず。皆。々。大。は。窮。乏。る
 有。さ。る。り。大。太。車。と。碎。く。通。る。と。爲。ま。ど。も。路。按
 くと。先。へ。進。こ。と。あ。ら。は。須。交。踏。踏。と。ま。ま。と。埒。明。さ。ふ
 氣。も。慙。れ。や。各。達。を。退。め。車。ハ。予。が。擔。ぎ。ら。承。す。べき
 人。ハ。前。は。立。牛。よ。力。と。添。へ。曳。め。と。云。と。何。も。具。ハ。成
 成。ら。ん。と。敢。て。返。言。う。ま。ま。と。云。は。大。太。ハ。龜。と。馬。と。傳。る。る
 道。ま。は。條。ぎ。並。其。身。兩。肌。ち。脱。つ。彼。三。丈。餘。る。り。此

梁の下へ肩と入と叫と言さる擔ぎさるまは車ハ此梁と
 戴らるら忽地上二尺升離さるる小を衆人呆らるるも
 是よカと得之難く眼光十四五間申出し共は拍掌て
 云つらるる兼親孝の太太郎殿とのと岐つるが只今の
 力量活動中く犀牛も及むと皆舌を巻いて感
 ける是より近々牛負のカ士と渾名しるると云は
 大太が母年齢四十は逆き頃まで子の無と歎き東浪
 見浦るる軍茶利明王へ祈誓をかけ七日茶籠満る
 夜白蓮光と放之懐中へ入と夢見く妊娠有し。さよハ
 少年より生質温和よく其膂力も大よ人は勝るると

ひとども常は兼養よくては此の力業もさるる人々強
 カ成夏と知る者少しと云や

第七回

神會大太角舩夜又回

話説東総夷隅郡東浪見浦は鎮守坐す軍陀利明王ハ神
 徳掲焉少く幸近の人渴仰す其地や大海は臨み波傳
 断岸の巖は激々濤より十餘町衆樹蔭蔽して登道仰ら
 いよく高く祠檀山上は峙く自ら神の稜威を益す去ハ春
 秋の祭祀ハ糸指跡は群聚を成しよる元は神を
 廻船ハ礼帆とて帆を半下して神を拜射しきり
 通船必得ち有と云やはと九月の祭は土地の獵戸潛

太郎うらみの勧進元あま晴天五日角舩真砂あつらん。
 元は借太郎ハ海辺の狭者あて常は乗徒舩者の後と
 数多食客と暮らんは餘南郷より出り夜又面と
 いろ角舩の末り居合らると東の関と定めぬは者力量
 至く剛く近年京鎌倉の舩場あま一度も輸ととらふと
 ぞままども小人のあひ平生己が強かと憍慢一人と人等
 因らざる曲者成ける夫は交遊無頼の漁人等おのづと彼と
 笠は系近郷は接乃く農民高買等と對し不法狼藉の
 み多りくまは人皆彼等公悪ぬはるるは頃まの神
 興村は鳴山源太と云へる者あり元田細五十石持たる農人

成るるが角舩博奕は皆活はる落穂くそ那所這所は緋
 洞く居るるが好る道とくいつろ田舎の名ごる舩者と我
 けるを備い西方の舩長とくぬは鳴山と一名白藤と與做
 のの脊中は藤の花と入疣よせし故りとりや既は角
 カ四目取つてき明日結の取組ハ彼夜又面と鳴山とと岐へ
 くるよぞ近郷の人と挙て如何もして鳴山は羸ととら
 せ平生狡猾なる漁人ハが願會と按て死と言あくる中
 和泉村の小年ハ寄會ひ明日の舩令鳴山十分はま
 逢ふとも中く夜又面が力量より及ぶまど若彼と人
 者ハ我村の大太らるるハ有へるが去どは者平常孝

あま平愈ハ隨即いざ差早くと観るあぞ。せんとぶつるまは
 大太郎。然るが糸つと糸やさん。隣家は苗守居の昏あを
 頼みお連立と諸共は東浪見込さしてど抵つくるは月ハ
 天色珠と和融よして明二系指の差若男女は死とく大
 賑ひくる衝く山上は登まは數圍の松栢とくと社壇と
 蓋ひ環る。実幾世も太浦建し石の花表の。一柱巖然と
 志く自ら神慮清しむる八人の八乙女五人の神樂男雲の
 まつと袖と翻し舞奏る有さる衆皆心身は澄し覚へたる大太
 津で神前より再并廻るる壇と下つと糸まは林麓の平地
 四方九間斗は柵欄と結ひ一箇の能場は構へ前なる

大鼓の音鼓々々として人衆驚くぞ。あま平愈ハ
 大に對い今日縁々両圍結ひ糸組とと格別賑ひる
 我小是迄糸の空しく帰らんも急趨る糸入て觀せんと勸
 且大太も今更祥延く終は柵門へぞ這入る。そは東西
 次第は勝負ありて中入も逆ぎ結ひの角能と成る時
 勸進元潛太郎。能場の極は盡り居る。しが。衝と立上り
 段音高く。五百五日目相撲も終り取終り。は一番も結
 るまど。未ご日も。修程高くと。何地の者あまあを我
 夜及面を相に望まは幾番あまも取すべし。と人もあ
 は波の内程と東の方より。出する角能を。是れは

四十討もく身の丈七尺有餘其の飽まで黒くして頬
 骨高く虎髭左右に刺さく聳眉人をうんと少眼ハ勝の
 如く飛龍の金糸を縛り纏ひたる纏ひたる緋の緹效端め
 の會釈も荒男揺る有りハ言経ど是夜又敵と
 知らざる同く西の方より紫のハ前髪少く新齡
 九餘の面奔泉和より色白く足相称く肌膚経
 強は藤のたて銀糸を縛り纏ひたる黒天鵝絨の緹效端め
 實は優くる好男兒是鳴山と見えたる已も西入土包
 より上り塵清しそおゆま行司ハ上田縞の挿續は麻の
 肩衣袴の袂高くより鮫皮鞆の腰刀と帯び黒漆は靴

字と鎮金形せる軍配團扇と持深江の總兵手に持あり二入
 が中は隔る物方各系團扇と去るよにわくと取組どり。
 観の渚人へへ奉公握りし臂を張る衆皆伸より同
 音は鳴山輸る源太瀛とと操動ぬ鳴山え来軽捷え
 龍之潛る右へ好し御が程ハ結極る去ど名は夜夜
 面が焦燥と強く跳起るは復難く両足うくと見えけるが。
 終は土苞と推せられしは観人ハ徒虚ふと肅然てこれ
 見えたる示は不意中遙西の方の観中より飛入と名乗る
 者あり人々驚愕して是と見えは本年甲壮餘目晴清秀
 温和と含み眉長く筋骨太く力瘤周より既九優くと

土芭よ上るカ士を是則和泉邑の大大成々々バ観者再び
 氣力と得実の勝負ハ是るやうと共ハ片垂ハ飲で待
 居らう夜又面大大と小觀て仕伎目今我取組と云つるや
 邊鄙の材雲ハ番の如き鳴山さく少降る騷雨の埃濡
 の行潦其方ハ我が片統と行まへんとさす思さげハ冷
 笑ハ大大鞞々大言ハ飾の哀まら尋常ハ取組ねと有ハ
 仍向ハ又も立入と云ハ見合せお終まバ各無手と云組
 ぬ夜又面大大と端々々々羈握んで唯一挫と推付とと大大
 身舂盤石の如く一すも動さまバ夜又面紫ハ相遠して
 皆跟跡見へる大大自由ハ組せんと故意諸

見夜又面得ると附入と混込両手に礎と取且バ大大上
 一の門腕大の男公中の提げ曲くと廻るや否一机揺てま
 倒五者の中へ投出せば観者ハ一同ハ喝采投つる屠りの
 一盞茶時鳴ハ止むる所ハ柵門の方開くと驚破印縁よ
 と云程ととあは潜太郎魁ハ多少の漢人と帶領て和泉
 の旗と撃殺せんとすハ艦揚と振廻ハ共と圍繞ハ寡
 不可敵衆和泉の者共ハ意の哀あて途を失ひ皆お懃
 形勢ハ大大其場ハ逃兵ハ歸つと大渴ハ大望ハ浪
 路と飛交ハ赤卒等已ハ羽翹の較とわす天地ハ翻報
 大膽と猜忌と奇怪と吐其るハ目ハ物とせんと有あ

木村某
うね子
馬ふれ
角能の
お牡丹



土苞と掻廻礫の下く投帖まが這所彼示る二人三人葉
基倒し礫段との勢に碎易し皆進み得ず見へる大
太ハ猶も撒深く熊場の柱は緒も然其針よりも容易
引抜き中央は唯一人仁王の如く衝き寄る勢も形
容は酒太郎と始め敷々の渾人ホと吐く言は
時雨は透し紅糸の如く四離八另逃去る大太今ハ易
志こそ少年ホと先は閑くと帰ると目覚しとモ見
ふる。原來和泉村ゆへ今日東浪見の熊場。村の年
少もが流流の夏夜へ下と大太が母ハ是と人と淨論
せしところ我子も彼はあまその中く何夏のは

べきと敢くむも勞せず居る人が追く人の巷脱は。
り大太が相撲の遺眼より輝の起るととびりた
仰天一瞥のうから野も外面へ駆せんと門邊の
面は蹴決傍へは瓦破と倒さしお所や急りらん其
気絶せしふと澤家の者ども寄會の薬は水よと躁
あつ折くら大太郎ハ母の待兼のふんと氣も女
陽息喘息歸る吾家の門は母と人へも走
撥はさる計り母人啼く大太帰ると母は正
氣附く下と連は喚活る女の通して母は
はき大太郎帰ると母はしや今和子居る聞得せしと

早く表へ走りて馳んとし興つりと覺へるが後ハあつた
と有るをば。いやはとよ。母人氣遣ひしあひそ是れ我身の
夏つとす。たは村の少年等。少津有けつと人の夜寝る
つり去るが。帰宅遅刻し母人よ苦勞うけりせし。い重
の我適天行させると勸解いらつと。是れ隣家の者の
厚情と謝し。母人一間へ抱行き。又保陽さつとせし。よむ
程つと氣力得ぬと。大太親よ思惟我少年等。病
癒れぬと。夏を曳かせしのみ。つと。既し母人よ。まを
怪めめさし。若其ま。相果る。は身天地の間
容れざる。大衆人もの悲るべし。畢竟。は身。福の世

交る。故いこと。唯く羨む。新門つりと。兔角何ぞ
つり。世々形ろく。思ひ息心道の。葉ひつるも。皆は縁
と。知るま。其霜月の。目め。盲母風の。心地として。あ
ら。次。病重く。つと。大。愁苦。堪。く。寐食
と。瘵。昼夜衣裳も。狛ず。者病う。ら。材中。回
隣。邑の者。日頃。大太が。孝。つと。を。居。れ
時間。皆米錢。持運。或ハ。醫師の。送迎。高貴の。業。亦
も。買。の。人。と。家。貧。と。い。何。夏。欠。す。
勤。め。も。定。命。限。つと。あ。つと。翌。月。の。十。日。つと。皆。母
睡。る。が。と。身。ま。つと。大。太。天。と。作。地。は。俯。く

後明まゝのまゝとて生著必滅のちひ如何し難きと思ひ。
終る僧と清して葬儀懇々営み敬祝忌日同墓所を假
屋と造る母好生の時のごとく。夏くらく七奇持るま先陰
授の如く日月は閑守らる。其年も早く起る。程々小祥
も過らば大太一日親戚を遣状を懇め信せり。宿志と
し。已が廬と出らる。は。下総國土氣坂井家の梅
孫代平内が妻小川ハえ上総萬在城主土岐氏の家中の
女ふく。則大太が母の姉成らる。先被所る。乃ね
至り。若母死去の夏とて。尚亦已が逐世の志を細
中く。結つらる。平内夫婦も兼く大太が孝が成らる。

風の便つらよ。波らび居る。其歸佛の深切らる。と感れ。
幸い濱田村日泰上人の當世法花の得者あり。曾て奇遇
の縁もあるふ。早速大太と誘ひ本行寺に詣り。今
見奉ら。夫が縁故を委く。速く。則剃髮とて願ひけり。
上人熟大太と見るひ歎息あつて。は男兒正果非凡。後果
必智識の成べき相あり。このめひ。終る大太と誘ひ法堂
に至り。諸僧と集め。く。鉦鞭と鳴ら。香と焼き。佛を
落髪とせ。名と戒律坊日と。給ひらる。是後世本行寺
二世名譽の上人と仰が。まのふ。は人の夏らる。

忠孝比王傳卷之二

